



貝谷淳一  
Junichi Kaitani  
(株) 能勢建築構造研究所  
第3設計室 次長

論文の作成も大詰めを迎え、大学の研究室から帰宅したのが朝の5時過ぎ。疲労困憊のため、とにかく睡眠しようとベッドでウトウトし始めた矢先に、これまで経験したことのない突き上げるような衝撃があり、恐怖の余りベッドにしがみついた記憶が今でも鮮明に残っている。無事、生きていることに感謝し、構造設計の技術者になる強い決意を持ったのはこの時であった。

今年1月に行われたJSCA関西支部の「阪神・淡路大震災20年企画」では事務局のメンバーに選出され、色々な先輩技術者と知り合うことができた。また、震災の記憶を風化させずに次世代へ語り継ぐにはどのような方法をとればよいか、綿密な打ち合わせを何度も重ねた。わたしは会場に展示するパネル作成の担当となり、当時の被害写真を改めて振り返ったが、ビルの中間層崩壊や校舎の崩壊等、これらの被害が現実起こったのかと思うと、言葉が出ない。もう少し時間がずれていたら、どのような惨状を呈してい

## わたしに課せられた使命

The mission imposed on me

たか、想像するだけでも身の毛がよだつ。あれから20年を経て身の回りの環境も随分変わったが、校舎の崩壊に自分の子供たちを重ね合わせることは決してできない。作業は多く発生したが、この活動を通じて構造設計に対する姿勢を再度見直す良い機会となった。

現在、わたしは4章で紹介がある大震研の免震ワーキンググループに参加している。建物を地震から守るために色々な方法はあるが、免震構造は有効な手段の一つであると考えている。入力地震動のスペックが大きくなると擁壁への衝突等、免震建物特有の課題はあるが、一つ一つの課題を克服し、世間一般の方が少しでも安心して暮らせる免震建物を提供するのが、わたしに課せられた使命であると考えている。また、社外の技術者や大学の先生方との交流は、色々な知見が得られる大切な時間。今後も継続してJSCAの活動に参加し、自分自身が切磋琢磨していけば、おのずと社会に貢献できると信じている。



山本康一郎  
Kouichiro Yamamoto  
(株) 能勢建築構造研究所  
第2設計室 主任

## 震災は私の構造設計者としての原点

The Great Hanshin-Awaji Earthquake is my starting point as a structural engineer

震災前年の1994年に神戸の大学に進学した私は、神戸市灘区の阪神大石駅近くのアパートを借り、一人暮らしを始めた。後期日程での受験で合格発表が遅かったため、ゆっくり物件を探している時間もなく、一件目の不動産屋さんで紹介してもらった手頃な家賃の一室を借りることにした。RC造4階建の2階であった。

翌年の1月17日5時46分、これまで体験したことのないものすごい揺れと轟音が襲った。何が起きているのかわけがわからないまま身を起こすと、まず室内の様子を見て呆然とした。家具は倒れ、窓ガラスは割れ、外壁も割れて一部崩壊し、外が見えている。辺りには警報音が鳴り響き、火災の煙も見えていた。

まずは外に出なければと思い、玄関ドアを開けようとするのだがまったく動かない。そこで窓から外を覗くと、上階の住人が「縄梯子があるからそれで下に降りよう」と声をかけてくれた。なんとか脱出し辺りを見ると、さらにす

ごい光景が広がっていた。

近くを走っていた阪神電車の高架橋が崩落していたのには驚愕した。古い木造家屋だけでなく、頑丈そうに見えたRC造のマンションやビルまでも、大きなひび割れを生じたり、層崩壊を起こしたりしていた。壊れるはずのないものが壊れている、そう感じた。

私が住んでいた建物は旧耐震の建物で、かなり危険な状態であったものの倒壊はせず、なんとか持ちこたえてくれた。この近辺の家屋倒壊率が100%に近かったことを後に知り、自分は運が良かったのだと思った。

この出来事が、私が構造設計の道へ進んだきっかけとなったことは間違いない。構造設計を学び、実務を経験するにつれ、あのとき壊れたものには、やはり壊れた理由があったのだと知った。震災の教訓を忘れず、得られた知見に基づいて誠実に対処していけば、被害を最小限にとどめることができる信じて、日々の業務にあたっている。